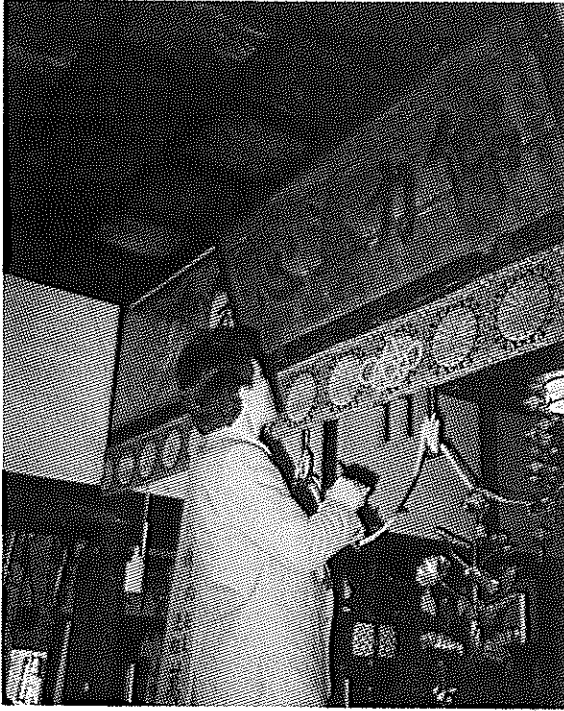


Title	[ グラビア資料紹介 ] 新発見の冊封使資料 ( 愛知県岡崎市 )
Author(s)	高良, 倉吉
Citation	浦添市立図書館紀要 = Bulletin of the Urasoe City Library(1)
Issue Date	1989-12-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12001/20387">http://hdl.handle.net/20.500.12001/20387</a>
Rights	浦添市立図書館

新発見の冊封使資料(愛知県岡崎市)



愛知県岡崎市の東公園に隣接して世尊寺(日蓮宗)がある。この寺院は明治38年(1905)日露戦争終結直後に沖縄を訪問した国粹主義の論客、志賀重昂(1863~1927)の菩提寺であり、一隅に彼の墓がある。彼の遺言に従って造営されたと言われるバゴダ形式の墓碑がひときわ目をひく(写真1)。志賀が沖縄訪問によって収集したコレクションは市立郷土館に寄贈されているが、その中に尚瀬王の冊封使として1756年来琉した全魁の扁額がある。この扁額は首里城北殿に掲げられていた由緒をもつもので現存の冊封使関係扁額の中でもとくに逸品に数えられる。

世尊寺の仏殿には志賀の遺族より寄贈されたとい

われる2件の冊封使資料がある。一つは志賀が久米島訪問の際に入手したと推定される冊封副使周煌(1756年来琉)の対聯であり、もともと久米島の天后宮に掛かっていたものである。今一つは尚瀬王の冊封使・副使として1808年来琉した斎鯤・費錫章の扁額である(写真2)。

以上の3件の扁額・対聯ともに『扁額・聯等遺品調査報告書』(1983年、沖縄県教育委員会)には収録されていない貴重な物である。このうち全魁の扁額は海洋博覧会期間中に沖縄館に借用展示されたが、

他の2点は未公開。志賀の沖縄訪問の経過については高良倉吉『沖縄歴史への視点』(1981年、沖縄タイムス社)、周煌の対聯については上江洲均「久米島天后宮の聯」(『地域と文化』第8号、1981年)参照。なお、斎鯤等の扁額には左図のように記されている(写真は1984年1月撮影)。

《高良倉吉》

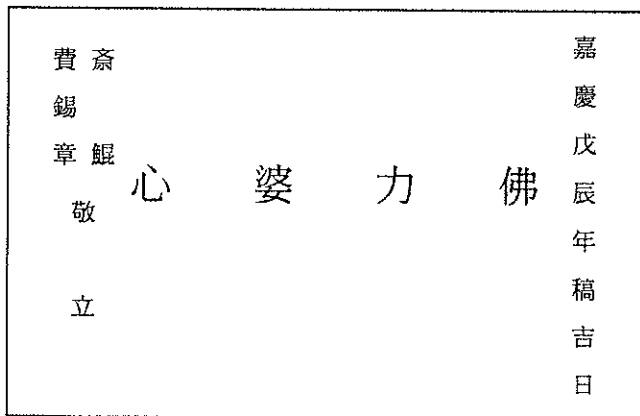
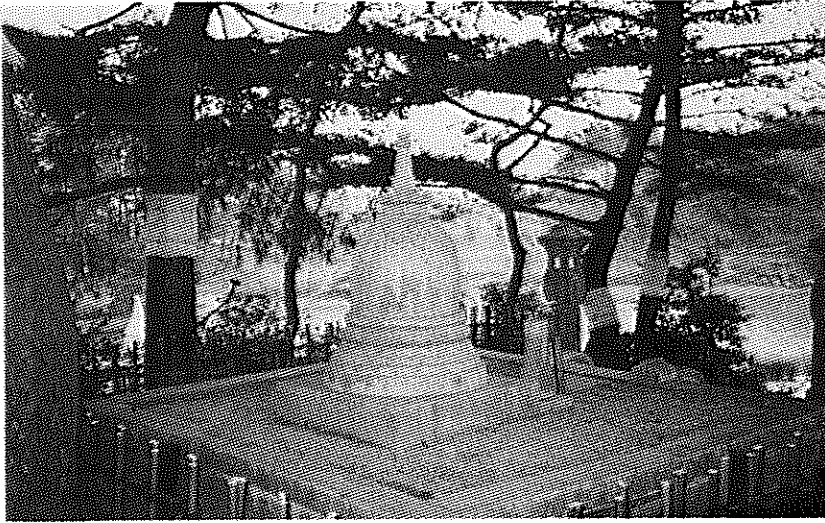


写真1 志賀重昂の墓（世尊寺境内）



宮古池間島に「びゃい」と呼ばれる羅針盤が伝わっている。海洋博覧会沖縄県出展「沖縄館」の展示物調査のため1974年同島を訪問した際、前泊徳正氏宅で見せていただいた。

「びゃい」は、海洋博覧会期間中沖縄館に借用展示されたが、前泊氏の語るところによると、王国時代、沖

縄本島方面など遠距離の航海に用いられたものだという。

「びゃい」は針の意味で、羅針盤のことを指す。中国式羅針盤の様式を基本にしているが、形状を見ると若干ヨーロッパの影響を受けたものかもしれない。胴底直径14cm、胴身高8.5cm、蓋高4cm、蓋表に「鴻源造」の銘がある。

(高良倉吉)



池間島の羅針盤